

令和 5 年度 東京都立立川国際中等教育学校 学校経営報告

校長 市村 裕子

1 数値目標に対する成果と課題 ※ ★印は重点目標

数値目標	成果／課題
<b>(1) 学校運営・組織</b>	
★① 学校評価の満足度 生徒 85% 保護者 85%	生徒 82.3%、保護者 93.4% ※ 前期生 89.1%に対して後期生が 74.6%となっていることから、後期生がより充実した学校生活を送ることができるよう対策を講じる必要がある。
② 服務事故 0 件	0 件 ※ 「複数人で複数回の点検」、「個人情報を手にしたら片付けてから次の行動」等の校内ルールが徹底されてきた。この状況を継続する。
<b>(2) 学習指導</b>	
★① 平日の自宅学習時間 (平均) 1・2 学年 2 時間 3 学年 2 時間 30 分 4・5 学年 3 時間	1・2 学年：62 分、3 学年：64 分 4・5 学年：57 分
② 教員相互の授業観察 各学期 1 回以上	9 割程度達成 (学期を問わず年間 3 回参観を含む) ※ 年間 4 回以参観、他教科の授業も参観等、各自の課題に応じた授業参観が行われている。教科横断的な参観を一層推進する。
③ 指名制による授業研究 延べ 5 人	1 人 ※ 時間割や行事等の関係で複数の希望はあったが実現が難しかった。
④ 附属小学校との連携による英語のカリキュラム開発 週 1 回	附属小学校の習熟度別クラス編成の指導内容・計画の開発、標準クラスのテキストの英語版指導資料の作成、教材選定等を実施
<b>(3) 生徒の挑戦促進</b>	
★① 学外の研修やコンテスト等への積極的な参加	担任団を中心に生徒のチャレンジを促進。都や国の施策、民間のコンテスト等に挑戦する生徒が増加
② 都教育委員会の児童・生徒表彰への推薦	2 件推薦、2 件表彰 (個人・団体)
<b>(4) 教務</b>	
① 附属小教務主任との打合せ	教務の業務割振りを含め、適性検査を中心に連携強化、双方の適性検査本部業務への参画促進により円滑な実施を推進
① 情報・数学 C への対応検討	学習教材の導入により対応
② 成績等に関するデータ点検 方法を内規に明記	成績処理の時期に教務より複数人で複数回点検を指示
③ 評価におけるカッティングポイントの見直し・修正	教科会を通じてデータに基づき実施
④ 授業評価アンケートの内容見直し	実施
<b>(5) 進路指導</b>	
① 進路だより発行 12 回以上	9 回
② 長期休業日中の講習 ・夏期講習 全学年で実施 100 講座開設 受講者延べ 1500 人 ・冬期講習 全学年で実施 40 講座開設 受講者延べ 500 人 ・春期講習 全学年で実施 40 講座開設 受講者延べ 200 人	・全学年実施 140 講座 受講者 2336 人 (参加率 81.4%) ・全学年実施 40 講座 受講者 713 人 (参加率 84%) ・全学年実施 34 講座 受講 223 人 (参加率 82%)
★③ 進学実績 (現役) ・大学入学共通テスト全員受験 (140 名)	139 名 (未受験は体調不良による)

<ul style="list-style-type: none"> <li>・大学入学共通テスト試験5教科7科目型受験者 90人</li> <li>・難関国公立大学等(東大、京大、一橋大、東工大、国公立大医学部)現役合格者 10人</li> <li>・国公立大学合格者 50人</li> <li>・難関私立大学(早大、慶大、上智大、東京理科大)現役合格者 70人</li> </ul>	<p>107人</p> <p>15人</p> <p>47人</p> <p>89人</p>
<b>(6) 生活指導</b>	
① 行事の満足度 生徒 85%以上 保護者 85%以上	生徒 77.2% 保護者 84.1% ※ 前期生 91.5%、後期生 67.7%
② 縦割り活動を取り入れた行事数 年間 5件	2件
③ 規範意識、道徳心・帰属意識を育成する取組 3件	7件
★④ 朝のHR遅刻者数 2,000以下	5131 (←3640←2767←2563←5789)
<b>(7) 安全教育・健康相談</b>	
① 避難訓練 前期課程 10回、後期課程 4回	実施
② 地域や関係機関と連携した防災教育 1回	実施
<b>(8) 生徒募集・広報</b>	
★① 説明会・授業公開参加者数 3000人	達成(内学校で実施した説明会参加者数は2526人)
② Webサイト更新 150回以上	283回
③ 一般枠応募倍率 4.0倍	4.07倍
④ 保護者への情報提供 立国ギャラリー、X(旧ツイッター)の活用)	定期的に実施。宿泊行事についても提供。Xのフォロワー数：1869
<b>(9) 探究的な学び・国際教育</b>	
① ラーニング・コモンズでの発表活動 5回	5回 ※ 授業では、国語、外国語「英語」を中心に利用頻度が増加
② 関係機関・大学等との連携事業 5回	5回
③ 英検取得者数 1級：5名、準1級：30名、 2級・準2級：100名	1級：6名、準1級：64名 2級・準2級：406名
★④ 学校評価 「学校は国際教育に積極的に取り組んでいる」80%	生徒 79.2% 保護者 82.6% ※ 前期生 85.8%、後期生 71.7%となっている。送り出しは人数の制限があるため、受け入れを強化し、日常的な交流の機会を一層推進する。
<b>(10) 施設活用・経営企画室との連携</b>	
① 予算執行率(中学校費と自律の平均) 75%	98.3%
② センター執行率 55%	53.4%
③ 管理職・企画室打合せ 月1回	実施 ※ 附属小の打合せが主で、課題に応じて参加
④ 附属小学校施設利用 2学期以降	利用規定策定、電子利用簿により授業や部活動等で利用開始

## 2 取組概要及び今後の課題

### (1) 学校経営・組織

- ① 6年間一貫教育のメリットを十分に活用するため、前後期という区分ではなく、1・2学年(BUILD)、2・3学年(CHALLENGE)、5・6学年(CREATE)を意識した学校運営に取り組み、生徒や教職員に考え方が浸透してきた。今後も各分掌、学年等でより一層、意識付けに取り組み、推進する。
- ② 企画調整会議を中心とした学校運営はある程度定着しているが、議論を深めることが課題であるため、主題に応じた小会議を充実させて焦点化と深化を図っている。加えて、各学期の最後に企画調整会議のメンバーによるPDCA会議を行い、意見交換を深めた。
- ③ 授業評価の結果について、生徒の自由意見を含め詳しい内容を個票で一人一人に配布しフィードバックを行った。今後は、その結果に基づいて教科会で率直に改善策を検討できるように取り組む。
- ④ 校内プロジェクトや研修と関連付けて策定したグランドデザインやコモンループリックを各教科等で意識して活用し、授業やその他の教育活動で具体的に実践していくことが必要である。
- ⑤ 若手教員や中堅教員の校内研修を、管理職と指導担当教員に元管理職の非常勤教員を加えた組織で担当し、研究協議を強化した。
- ⑥ 様々な国際教育を推進し、進路実現を果たしてきたが、国際教育(海外交流)が全都立の取組となっ

ていること、令和7年度入学生から男女合同定員になることから、本校の魅力を更に創出し広報するため、海外交流「送り出し」の内容の工夫、立国に居ながらにして国際感覚が養えるような長期的な海外交流「受け入れ」の実施、探究学習を中心に理数や科学の取組み推進し、「探究の立国」、「理数にも強い立国」、「ワクワクが止まらない立国」を目指す。

- ⑦ 予算の執行等を通じた経営企画室職員と教員との連携について、計画外の経費計上の要望や執行に際して実施計画の不備等の事例があった。また、企画室における支払い等の対応で課題となる事例があった。企画室職員と教員とのコミュニケーションの一層の促進と、企画室内の相互点検体制を強化する。
- ⑧ 体罰に当たる指導は発生していないが、言葉遣いや生徒の呼び方については引き続き誤解が生じないような対応が求められる。今後も企画調整会議や職員会議を通じて、相手を尊重する姿勢を前提に、発達段階や個々の生徒の特性に応じた生徒の心に響く言葉遣いや表現が必要であることを毎回、確認し意識の向上を図る。
- ⑨ 生徒の成績や調査書等に関する資料について複数人で複数回点検する体制や、個人情報の確実な取扱いを引き続き強化する。
- ⑩ 分掌毎に「アーリーデイ」を設定し、効果だけでなく効率を求めることによる働き方改革を目指しているが、特定の業務の繁忙期や特定の業務の担当者については勤務時間外労働が増える現状がある。

## (2) 学習指導

- ① 新学習指導要領の内容を確実に効果的に実施するため、教育課程を見直し修正した。今後は、グラウンドデザインと連動し、中高一貫教育6年間のメリットを最大限に生かした体系的な教育内容を実施するため全学年・全教科でルーブリックに基づいた教育を展開する必要がある。
- ② 一人一台端末の活用が浸透してきた。しかしながら、まだ活用に至らないケースがあるため、好事例を研究実践紀要としてまとめた。新年度に配布し共有する。あわせて、次年度、授業に求める重点の一つを昨年度同様一人一台端末の使用とするが、一步進めて効果的な利用とし、質を深める取組を推進する。
- ③ 全教科で主体的・対話的な深い学びを意識した授業が増えているが、振り返りの充実はいまだ課題である。生徒自身による振り返り時間を確実に取り、生徒のメタ認知力を向上させるとともに自立した学習者となるよう全体で取り組む。
- ④ 教科主任会議をより充実し、大学入学共通テストに対応した学習指導について情報収集を進め、生徒の達成感を高める指導方法の工夫を継続する。
- ⑤ 長期休業中における予備校等での進学指導研修に参加する教員が増え、難関大学合格に直結する教科指導力が向上している。大学入学共通テストに対応した教科指導力を継続して高めていく。

## (3) 生徒の挑戦促進

- ① 担任団を中心とした積極的な声掛けにより、次世代リーダー育成道場への応募者が増え、他の都教育委員会の施策にも、分野に偏りなく応募する生徒が増えてきた。都教育委員会の施策に取り組んだことで課題意識が高まり、その課題探究のため、国のトビタテ！JAPAN 留学プログラムに挑戦して留学する生徒や、次世代リーダー育成道場での留学が契機となって海外大学に進学する生徒も出てきている。また、自分の特長を活用し、外部の小説コンテストに挑戦して賞を取る生徒も出るなど、生徒の活躍が目立つようになってきた。今後も、多様な機会を提供し、生徒が挑戦できる環境を整備する。そのため、自校の取組に加え、都教育委員会の指定校を活用するなど次年度以降も積極的に機会を提供する。
- ② 生徒の努力を積極的に評価する。今年度は児童・生徒表彰に1名と1団体の取組を推薦し、両方とも表彰された。そのことを学校として祝い、他の生徒とも共有するため、横断幕を作成して校門に掲出した。今後も、結果に関わらず、生徒の挑戦を全教職員で共有し、声を掛ける取組を継続する。

## (4) 教務

- ① 昨年度に引き続き、附属小学校の英語教育について、中等の英語科がカリキュラム開発に協働して取り組んだ。今後は12年間の一貫したカリキュラムを検討するPTを設置し、意見交換をして相互理解を深めたい。その際、教科だけでなく、国際教育の在り方についてもタブーなく検討する。
- ② 5年生までは文理融合による立国教養主義を掲げているが、必修科目である数学Ⅰの単位数が標準単位を下回っていたため、数カ月にわたり各教科で協議し、教科主任会で検討を重ね単位数を増やした。
- ③ 大学入学共通テストに「情報Ⅰ」が必須として位置付けられたことにより、6年生の自由選択に講座を設定した。専任教員がいないため、自学自習に活用できる映像教材が必要であること、あわせてより進路選択の幅を広げるため、新1年生に対して小学校の算数の徹底理解を図る必要があることから、複数の業者によるプレゼンテーションと質疑応答を行い、スタディサブリの導入を決定した。1～4年生

は全生徒に導入し、5・6年生は任意とする。今後は、昨年度から実施している共通のフォーマットによる学力推移調査結果の自己分析を行った後、弱点克服のためスタディサプリの映像教材を自分で選択して取り組む。これにより学習の個別最適化と自分自身で学ぶ行動に踏み出すことを促進する。

- ④ 教務が主導して「複数人で複数回の点検」が徹底され、ヒヤリハットを含め成績に関する課題は発生していない。次年度は今年度より転入者が多いため、この状況を確実に継続する。

## (6) 進路指導

- ① 後期進路指導担当者会を実施し、進路指導部との共通理解を図りながら立国の進路指導の「型」を確立した。
- ② 教科会と連携し、教職員全員が参加する悉皆研修として模試分析会を実施した。今後は、その分析会での共通理解に基づき教科で共通した指導を行い、生徒の学力向上に取り組む。また、6年生の大学入学共通テスト受験後のケース会議を、任意の1クラスを悉皆とし、全教員が模試分析の集大成であるケース会議を経験することにより、日頃の面談内容の充実を図るなど進路指導の効果を上げる。
- ③ 6年間の進路指導構築に向け、前期で実施する学力推移調査について共通の資料を活用して生徒が行う模試分析を実施した。次年度は導入するスタディサプリアを活用し、分析結果を実際の学習に結び付け、学力の一層の向上を図る。
- ④ 大学入学共通テスト後に実施する6学年のケース会議について、ICTを活用して情報を共有するなど内容を改善した。今後は、6学年担任だけでなく、他の教員も参加しそれぞれの教員がもつ有益な情報や意見交換が行えるように実施内容や資料の改善を図る。
- ⑤ 長期休業期間における講習については、春季の講座数はわずかに目標数に到達しなかったが、参加者数は目標を大きく上回った。面倒見がよく、生徒の力を伸ばそうと熱心に指導することが本校の文化としてあり、これからも伝統として大切にしたい。また、前期生の講習では、英語と家庭科による教科横断型の内容や、授業で実施した実験を深める講座、文学散歩、国語の創作教室など、学ぶことの面白さに気が付く講習が各長期休業で開講された。さらにその講座で作成した成果物をラーニング・commonsに掲出することで共有を図った。
- ⑦ 保護者会や進路だより、学校ホームページ等を中心に、分かりやすい進路情報発信を継続する。進路だよりは9回発行し、内容は1・2年生のBUILD期、3・4年生のCHALLENGE期、5・6年生のCREATE期に宛てた情報を記載し、全学年に配布して意識を高めるとともに全教員にも配信して進路指導の共有を図った。また、進路だよりを進路部プロバー全員が担当することで、進路部指導の専門性の向上に努めた。
- ⑧ 前期生のインターンシップを実施したが、生徒がキャリア教育の一環として実施していることを認知できる連携先を獲得する必要がある。次年度は、立川市の商工会議者や国際ロータリークラブとの連携により、本校の探究プログラムである「立国 LEADER プログラム」の一環として探究的に実施する。そのため、進路指導部に探究セクションを設け、分掌名を進路探究部として取り組む。

## (6) 生活指導

- ① 登下校指導や挨拶励行指導、遅刻指導、服装指導、SNSマナー指導等を通じて、生活習慣の確立を徹底したが定着させるために継続した全校体制での指導が必要である。生徒会が自分たちで生徒に働きかけたいとする動きが出ており、生徒主体で取り組めるよう支援する。遅刻については、目標値を超えて増えているが、目標値の修正はせず、効果的な取組を学年間で共有し、粘り強い対応を継続する。
- ② 一人一台端末の活用場面に授業以外にも拡充し、生徒が主体的に取り組めるようにしているが、それによる課題も発生している。利用を制限するのではなく、適切かつ有効な使い方を生徒自身が理解して取り組めるよう、時期を捉えて全校生徒に投げかけるとともに、個別指導も行った。
- ③ 生徒情報交換会を定期的に変更し、全職員で情報を把握するとともに、個々の生徒の状況に応じた指導を行った。
- ④ ホームルーム活動や学校行事、部活動等の活性化を通じて、生徒の帰属意識を高める。次年度は、1年生に対して4月中旬に立国スプリングキャンプを実施する。チームビルディングの活動を行い、クラスや学年への帰属意識を高めて、学校への登校意欲を高めるとともにチーム立国の基盤を作る。
- ⑤ 三祭（体育祭、文化祭、合唱祭）をすべてコロナ禍前の実施に戻し、感染症対策を講じた上で、制限をすべて外して実施した。各行事の実行委員が中となって高い意識で取り組んだことにより、三祭の実施に起因するウイルス感染は発生しなかった。
- ⑥ 生徒会による自主的なマナー向上の呼びかけや、附属小学校との交流会の実施など、主体的な取組が活発になってきている。本校の校則等について意見出しが行われており、可能な内容については、生徒の自覚や自主性を促すような取組へつなげていく。

- ⑦ 生徒が互いの違いを認め、尊重し合って学校生活を送ることができるよう、1・2学年で都教育委員会の事業を活用し、グループ・エンカウンターを年間2回実施した。生徒の事後アンケートからは高い満足度が得られているが、次年度からは立国スプリングキャンプの導入や日常的な声かけ、学年行事の充実など、自校での教育活動を工夫して実施することにより代替することを検討する。

#### (7) 安全教育・健康相談

- ① 避難訓練、前期朝礼時の安全指導、養護教諭による事故報告カードの徹底などを通じて、生命尊重を第一に据えた生活指導を推進した。
- ② 定期的な生徒情報交換会やスクールカウンセラーを交えた臨時ケース会議など、発生した事案に対して組織体・迅速に対応する体制が整った。
- ③ 避難訓練を、授業中に予告なしに実施するなどして生徒の意識を高めるとともに、教員にとってもより実践的な安指導力を高められるように工夫して実施した。指導いただいた消防署の職員の方からも生徒の真剣な態度を評価していただいた。
- ④ 昨年度秋に都教育委員会から指定された「ユースヘルス事業」を通じて、思春期に特有の悩みに産婦人科医が個別に対応し、必要に応じてスクールカウンセラーに繋げるとともに、昨年度実施した保護者対象の講話に続き、生徒対象の講話を実施した。本事業をより効果的に推進するため、委員に体育科主任を加え、保健の授業との有機的な連携を図った。自分事として捉えられない意見もあったが、生徒の反応は概ね良好であった。次年度は、対象学年を広げるとともに、自己理解だけでなく、自分と異なる性についても理解し、相互に尊重し合う態度を醸成するための工夫を検討する。本校では、養護教諭が中心となって教科や学年と連携して取組を展開しており、組織的で充実しているとの評価を得ている。

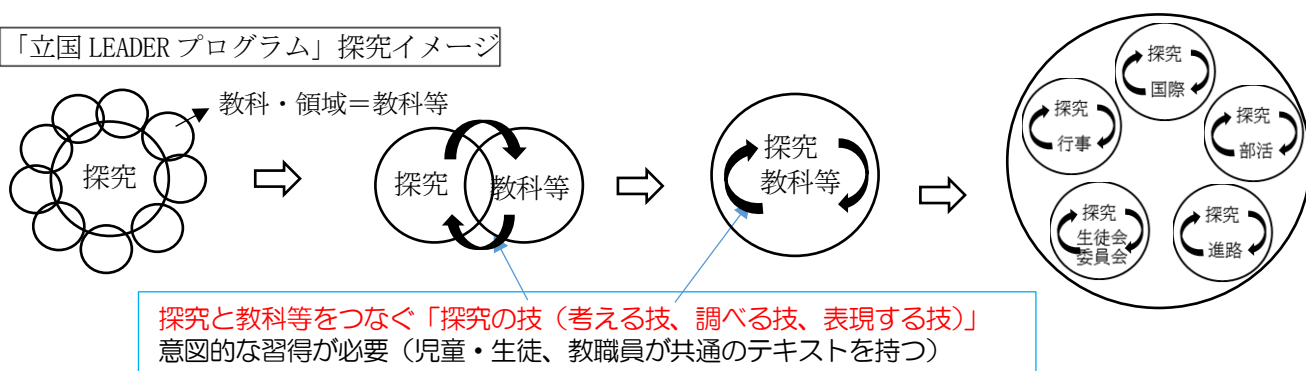
#### (8) 生徒募集・広報

- ① 校長直轄の魅力創出委員会を設置し、本校の魅力をより効果的にPRするためにスクールガイドをデザインから刷新した。委員会の様々なアイデアを取り入れ、英語が早く仕上がることで理数に時間をかけることが可能となることから、結果として進路希望は文理それぞれ約半数であること、例年医学部に進学する生徒がいることが分かるような作りとし、なるべく生徒自身の声で本校の魅力が語られるよう工夫した。
- ② ウェブサイトの各ページの扉に生徒の写真を配置し、内容の充実を図った。また、X(旧ツイッター)との連動により多角的な広報を目指した。
- ③ 説明会では、昨年度より多くの生徒が登壇し、英語で学校説明をすることで、本校の魅力をアピールした。事後アンケートでは評価が高く、今後もこの方針を継続する。体育館で実施する説明会に加え、小学4年生を対象としたミニ説明会をラーニング・commonsの視聴覚ホールを活用して開催した。
- ④ 新入生アンケートの結果や生徒の居住地を参考に塾に声を掛けて塾対象説明会を授業参観とセットで2回開催した。全体説明終了後には個別相談を設け、塾との情報交換を行い、今後の広報活動や教育活動の展開に参考となる内容を把握することができた。
- ⑤ 昨年度の倍率から、学校全体で危機感をもち一体となって取り組んだことにより、中高一貫教育校の倍率が減少する中、本校は一般枠の倍率を増加させ、目標値を超えることができた。また、適性検査当日の不受検率も低く、本校を志望する固定層を掴めたのではないかと考える。次年度以降もこれらの取組を継続させ、加えて将来の本校志望者を固定層として増やすため、小学3年生も加えたミニ説明会を4月から1カ月に1回、テーマを絞って行う。テーマは、あらかじめアンケートで把握した結果により設定し、本校について知りたいことが分かる説明会とする。6年生には個別相談を実施するなど、学年の実態の応じた形式とする。また、主に5・6年生が参加するマスター説明会との差別化を図り、本校の様々な魅力を月毎に説明することから名称を「立国EXP02024」として実施する。
- ⑥ 海外帰国・在京外国人枠募集については、倍率がかなり回復したが、より多様な生徒が受検できるよう、海外帰国・在京外国人児童を対象に説明会を開催している団体の情報を把握して、説明会に参加する。そのために必要な予算措置を講じる。
- ⑦ 本校の広報紙であるTachikoku Timesを昨年度まで年11回作成し、近隣中学校や地域にも郵送し、校門横のショーケースに適時掲出するなど、地域に本校の教育活動を理解してもらう工夫を行っていたが、今年度は9回の発行に留まった。次年度は、本来の発行である月1回発行、年間11回以上発行を目標とする。
- ⑧ コロナ禍により中止していた小学生対象の部活動体験を秋に2回実施した。文化部も参加し、児童が体験できるよう工夫して実施し、立国生のホスピタリティを発揮して取り組む姿が見られた。次年度は実施時期を再検討するとともに、部活動の地域連携・地域移行の取組を活用して日常的な部活動体験が図れるよう工夫する。

(9) 探究的な学び・国際教育

- ① 総合的な探究の時間に取り組んでいる外部プログラムを活用し、今年度からは4・5年生が「困っている人を笑顔にする」を目的に「社会を変える」をテーマにグループで取り組み、校内コンテストを実施してクラス代表が全国コンテストに参加し、昨年度に引き続き5年生の代表グループがチェンジメーカー賞を受賞した。また、昨年度設定した目標である都教育委員会の探究発表会に別のグループが参加し、賞は逃したが作成した資料について評価をいただいた。生徒の探究に対する意欲の高まりを感じている。
- ② 探究的な学びを充実させ取り組む分野の充実を図り、6年間の流れの中で探究の高度化を図れるよう、総合的な学習の時間及び総合的な探究の時間を校内名称「立国 LEADER プログラム」として構築する。  
1・2年生を「探究教養」と位置付け、探究の仕方を体験的に学び、2年生ではインターンシップを地域の商工会議所や国際ロータリークラブと連携して課題に取り組み、アントレプレナーシップについて学ぶ。3年生では、4・5年生で「探究専攻」を選択するため、研究計画書を作成する。4・5年生では、現在取り組んでいる社会を変える「社会探究課題」の他、2年生で学んだアントレプレナーシップをより高め、企業との連携による提案を行い、実際に商品開発をして流通・販売に取り組む「地域提案課題」、大学の研究室や企業と連携し、興味・関心のある自然科学や理数の分野を追求する「理数探究課題」の3分野から選択して探究を深化させる。最終的には論文を作成する。その指導には全教員であり、生徒が担当者を超えて力を付けることを歓迎し、生徒の探究が高化した際に、専門機関を紹介できるよう連携先を開拓する。
- ③ 4・5年生で取り組んだ探究専攻の論文は、外部のコンテストや研究会等で積極的に発表し、その論文を活用して総合型選抜や海外大学に挑戦するなど、進路の複線化を図りキャリアの実現につなげる。
- ④ 「立国 LEADER プログラム」で身に付けた概念やものの見方・考え方を活用し、すべての教育活動において探究的に取り組むことができるよう、学習者と指導者が共通の「探究の技」（考える技、調べる技、発表する技）をもって取り組む必要がある。そのために、全員が共通の資料や教材をもってすべての教育活動で共通の表現や方法を用いることで「探究の技」を定着させ、学習者自らが探究的に学べるようになることを目指す。

「立国 LEADER プログラム」探究イメージ



教科が探究に絡む。

探究と教科等が循環する。

探究と教科等の境が無くなる。  
「教科＝探究」になる。

すべての教育活動で児童・生徒が認知的に探究を行う。すべて探究になる。

- ⑤ 国際交流「送り出し」では、より多くの生徒に機会を提供できるよう、各長期休業期間に一つ任意参加が可能な海外フィールドワークを設定することを目標に、春季休業における「シンガポール国立大学リーダー研修」（3・4年生対象）に加え、本校で講演いただいたことをきっかけに連携が実現した吉岡秀人医師の病院でボランティアに取り組む「カンボジア・ボランティア巡検」（1～5年生対象）を実施した。この海外巡検は、本校オリジナルのプログラムである。いずれも事前研修として、前者は外国人指導者による英語活用研修を実施し、後者は吉岡医師が活動するジャパンハートによるオンライン講座を実施している。また、事後学習として前者は英語によるエッセイと振り返りを実施し、後者は気付きをエッセイにまとめジャパンハートに送る振り返りを実施している。ジャパンハートからは、生徒の気付きや新たな疑問等に対して詳細なコメントを付けていただき、価値付けをさせていただいている。今後は、夏季休業中に NASA を訪れ宇宙産業や宇宙工学を学び、近隣の大学を訪問して交流する「米国サイエンスアカデミー」（仮）の実施を予定している。
- ⑥ これら3つのプログラムと、5年生で全員が参加する「オーストラリア・スタディツアー」、3年生で全員が参加する京都・奈良の国内研修とを線でつなぎ、本校の国際教育のストーリーを創ることが求め

られる。その際、3年生で実施している国内研修について、タブーなく協議したい。また、12年間一貫教育校になることも念頭に、全体を俯瞰して国際交流の在り方を検討することが重要である。スクールミッションに基づき12年間という長いスパンで一貫した流れで国際教育を工夫することで、本校独自の魅力ある教育プログラムを構築することができると思う。

- ⑦ 国際交流「受け入れ」では、昨年度に引き続き、都教育委員会の施策を積極的に活用し、11月に「海外高校生招聘プログラム」によりエジプトから12名の留学生を受け入れ、12月には「東京体験スクール」によりオーストラリアから6名の留学生を受け入れた。この受け入れでは、留学生は全員、立国生の家庭でホームステイを行った。ホームステイを希望する家庭は30家庭あり、国際教育への理解と参画意欲が高いことが改めて分かった。次年度は、「日常から養える国際感覚」を果たすため、民間のプログラムを活用し、留学生の長期受け入れを秋から実施することを予定している。
- ⑧ 全学年で英検指導を継続し、目標を大きく超える成果を得た。都の国際教育事業であるGE-NET20に指定され、4・5学年で実施する英語の成果を測る検定について、5学年は進路活動に資するTEAPを継続したが、4学年は英語教育の成果によりそれまでの試験では十分に成果を測ることができなくなったことから昨年度よりケンブリッジ英検を導入しており、生徒の英語活用能力の伸長について成果検証を行い、結果を指導に活用することで、授業マネジメントを推進する。
- ⑨ 現在のイングリッシュ・サマー・セミナー（1・2年生対象）は、英語活用能力を高めることを目的に、10人程度の生徒に対し、外国人指導者が1名付いてディスカッションやスピーチ等に1週間、全日のスケジュールで実施するプログラムで任意参加であるが、例年多くの生徒が参加し、3年生で取り組む英語劇への意欲に繋がっている。5年生で行う海外フィールドワーク及び6年生での自分の進路を考えるフェーズへの橋渡しとして、次年度より3・4年生を対象に、イングリッシュ・サマー・セミナーⅡの実施を予定している。これは、国際社会で貢献するリーダーとなるためのキャリアについて、海外大学の学生から英語を通じて学び考えるアカデミックなプログラムである。昨年度の卒業生には、東大と米国コロンビア大学に合格し、4月に東大に入学して秋からはコロンビアで学ぶ生徒が出ており、今年度も、オーストラリアの工科大学へ進学する生徒が2名出ている。内1名は、次世代リーダー育成道場での経験が契機となっている。進学先として海外大学を希望する生徒が出てきていることから、より一層、有意義な選択ができるよう、イングリッシュ・サマー・セミナーⅠでの学びを基に、より一層アカデミックな内容として実施する。あわせて、このプログラムのために来日する海外の大学生をホームステイで受け入れることが可能となるため、国際交流「受け入れ」を活性化する側面ももつプログラムとする。

#### (10) 施設活用・経営企画室との連携

- ① 中等生も使用する施設である附属小学校校舎のラーニング・コモンズについて、司書を中心に整備し生徒の利用促進を図った。中等校舎からラーニング・コモンズへ続く空中歩廊の壁に、中等生の教育活動の成果を貼り出し、共有を図ることで「チーム立国」としての雰囲気醸成した。
- ② 昨年度からの課題であった附属小学校の施設利用に向けた環境整備については、校内規定を定めて電子で予約を行うことで、授業や部活動等で使用できるようにした。今後は、特に部活動において必要な備品などを、附属小学校とコミュニケーションを図りながら相互理解と協力に基づいて整備することを検討する。
- ③ 企画調整会議や毎朝の教育管理職と経営企画室長との打合わせ等を通じて、課題把握、業務の進捗状況の確認を徹底し、迅速かつ効率的な業務遂行を目指した進捗管理を行った。
- ④ 施設設備に問題が発生した際は、学校経営支援センター等と迅速に連絡調整を行い改善した。
- ⑤ 予算執行について、関係部署と早期の連絡調整を徹底し、確実な執行に努めた。中学校予算及び自律予算の執行率は目標を遥かに上回る成果を上げているが、指定校に係る予算については、執行残が残ったものがあつたため、配付された予算はすべて確実に執行するよう、企画室職員からもアイデアを得て、生徒のために有効活用する。